

## 「敦賀屋」調査報告（第2次）

外岡慎一郎

### はじめに～今年度調査の概要

本調査の趣旨ならびに調査に至る経緯、および調査の初期的成果については、「敦賀屋」調査報告（第1次）（『敦賀論叢』22、以下「第1次」と略称する）に紹介したところであるが、2004年度から開始されたこの調査も、2008年度からは二つの意味で新たな段階に入ることになった。

まずは、敦賀市教育委員会の業務委託事業（事業名：「敦賀屋」関係史料調査）として遂行できることになったことである。予定では2008年度より3カ年度の継続事業であり、敦賀のまちづくり構想への貢献をも視野に入れた「敦賀屋」所在地の現地調査を含み、過去・現在を通した時系的にも総合的な調査事業となるはずである。

次に、調査の内容も今年度をひとつの転換点として、「敦賀屋」を探す作業から、個々の「敦賀屋」を探究する作業に重点を移していくことになるだろうということである。後述するように、自治体史などの文献資料を博搜して「敦賀屋」を探す作業については2009年度からは縮小しても大過ない印象を今年度調査のなかでもつことができたことがその主たる理由である。また、これに加えて、「敦賀屋」搜索作業のなかで、個々の「敦賀屋」についての考察をおこなうための史料群についての情報が得られたこともそうした判断の背景にはある。2009年度以降は、列島各地に展開した「敦賀屋」の個別調査・研究を中心とした構成になっていくと考えている。

さて、今年度調査においては、なお「敦賀屋」搜索作業を中心に下記3領域において調査を実施した。

- (1) 「敦賀屋」所在地への現地調査。
- (2) 自治体史等の文献資料博搜による「敦賀屋」搜索。
- (3) 電話帳等の公開情報博搜による「敦賀屋」関係情報の搜索。

「敦賀屋」所在地への現地調査については外岡単独行の作業ながら、男鹿半島船川の敦賀屋六左衛門について敦賀出身の商人との確証を得るなど、いくつかの成果を上げることができた。

自治体史等の文献資料、ならびに電話帳等の博搜については、敦賀気比史学会の田代章子、清水千春、西ノ上隆雄各氏の協力を得た。熱心なる作業を遂行していただき、「敦賀屋」情報のみならず、敦賀商人の交易や交流についての情報もあわせて収集していただいた。「敦賀屋」研究の枠を超えて、より広い視野からの敦賀ブランド探究にもこれらの情報は貴重なものとなるだろう。ここに記して謝意を表したい。

以下は、今年度「敦賀屋」調査の成果の概要である。

## 1. 「敦賀屋」一覧の更新

表1として掲げる書肆「敦賀屋」一覧（「第1次」と表番号は同じ）の更新についてまず述べておく。書肆「敦賀屋」の搜索は「第1次」においてほぼ終了した感があり、Web情報検索のなかで敦賀屋善蔵が摘出されたとはいえ（更新データについては網掛で示す）、今後新たな書肆「敦賀屋」に接する機会は僅少といえると考えている。また、屋号に敦賀を冠した理由についての考察を含む、書肆「敦賀屋」の詳細調査については、『大坂本屋仲間記録』その他の江戸時代の本屋関係史料、文献へのアクセスは来年度を予定している。したがって、今年度調査の成果として一覧を更新すべき情報は少ないというのが実情である。

ただ、書肆「敦賀屋」研究の窓口として参考にさせていただいた、安本美恵「大坂本屋仲間雑致ー1ー行司本役及び加役など」（『語文研究』58、九州大学国語国文学会、1984年）、山口佳代子「近世大阪における出版業界の展開」（『歴史評論』547、1995年）に大坂本屋仲間へ属した書肆「敦賀屋」の営業期間についての情報が載せられおり、これを表1に反映させることができた（安本、山口と表記）。

次に、表2諸商売「敦賀屋」一覧については多数更新データ（網掛部分）を収めることができた。自治体史等文献資料の博搜が功を奏した結果であるが、それでも地域的な分布状況という点では、「第1次」掲載の表2に示された特徴を再考するだけのデータを入手することはできなかった。

ちなみに、福井県南越前町立河野図書館海事資料室には、かつて日本海沿岸地域有数の北前船寄港地であった旧河野村が戦略的に収集した北前船関係各自治体史が架蔵されている。地域的には、北海道から北陸、山陰、瀬戸内海沿岸諸地域に及ぶ。「第1次」の段階でも、これら自治体史のなかから「敦賀屋」を検出する作業はおこなったが、今年度は敦賀気比史学会会員3名の協力を得て、ここに架蔵されるすべての自治体史を閲覧することができた。表2には、その成果が反映されているのであるが、その作業をもってしても、「敦賀屋」展開の範囲を北陸以西の山陰、瀬戸内海沿岸諸地域に広げることができなかったのである。

表1：書肆「敦賀屋」一覧

名 前	営業期間参考データ (出版物確認最古/最新、その他)	所 在	典 拠				備 考
			A	B	C	D	
敦賀屋善蔵	1773『正化化雲天界地元寄附伝』 1870『生志編』	本町五丁目	○				
敦賀屋儀(表・訪)	1773『正化化雲天界地元寄附伝』 1794年刊『通見』 1860『和漢年契』		○	○			
敦賀屋久(九)兵衛	1811『当世化雲天界地元寄附伝』 1813『本屋仲間』		○				
敦賀屋九兵衛	1853『和蘭年契』 1855『本屋仲間』 1857『和蘭年契』 1874『和蘭年契』(松村文海堂)	心斎橋筋順慶町 一丁目 心斎橋筋南一丁目 心斎橋筋南二丁目 一丁目心斎橋筋一丁目		○	○	○	松村氏、文海堂 開帳：1724-1873 (317)
敦賀屋五兵衛	1765『和蘭年契』		○				
敦賀屋四郎兵衛	1742『行基菩薩尊像記』 1828『真徳寺縁起』	順慶町五丁目 一丁目	○				開帳：1728-1746 (山口)
敦賀屋庄(庄)七	1773『正化化雲天界地元寄附伝』 1838『続々通見』		○				
敦賀屋清助	1825『通見』 1837『新刊』	難波町五丁目	○	○			松村氏
敦賀屋清兵衛	1892『万葉物語』		○		○		
敦賀屋善右衛門	1726『本屋仲間』	本町中之町	○				
敦賀屋善蔵	1813『孝教大義』 1869『続々通見』						
敦賀屋善兵衛	1847『孝女伝』		○	○			
敦賀屋大助	1766『和蘭年契』		○				
敦賀屋あむね七郎	1773『正化化雲天界地元寄附伝』 1884『和蘭年契』	心斎橋筋東二丁目 心斎橋筋安室町五丁目南入 心斎橋筋北久宝寺町	○	○	○	○	文海堂の手代 1823独立 文海堂
敦賀屋東七	1877『天文分野之図』 1896『和蘭年契』	心斎橋北町東側	○	○			
敦賀屋修七	1712『御代幸之記』 1867『和蘭年契』	心斎橋通久宝寺町南入 心斎橋筋安室町五丁目南入 心斎橋通北久宝寺町	○	○	○		梅村氏、文海堂
敦賀屋文四郎	1811『金保堂五郎全』	北久宝寺町五丁目 安室町五丁目 一順慶町五丁目 一北久宝寺町五丁目 一右玉町	○				1768本屋仲間加入 開帳：1772-1795 (安本)
敦賀屋六兵衛	1771『通見』 1820『和蘭年契』		○	○			
敦賀屋善助	1820『墨谷園記』(森村氏) 1893『和蘭年契』 天保『和蘭年契』	岸区心斎橋筋一丁目 東区東本町五丁目					森村氏
敦賀屋久(九)兵衛	1826『和蘭年契』 1870『和蘭年契』	四條坊門通 (寺町通南詰前)	○	○	○	○	
敦賀屋三右衛門	1872『大坂物語』 1875『和蘭年契』		○	○		○	
敦賀屋弥兵衛	1893『和蘭年契』 1893『和蘭年契』		○				
敦賀屋治兵衛	1893『和蘭年契』	未詳	○				

※典拠A=井上隆明『改訂増補近世書林版元総覧』（日本書誌学大系76、青裳堂書店、1998年）、B=矢島玄亮『徳川時代出版者出版物集覧』（萬葉堂書店、1976年）、C=井上和雄『慶長以来書集覧』（評論社、1978年）、D=京都府書店商業組合、1994年）なお、備考欄開帳期間と出版実績（営業期間参考データ）に齟齬があることについては、出版実績には再版に初版の書肆情報が掲載された場合も含まれ、これがこの欄作成の基礎資料となった図書館等の書肆情報に混入していること、および安本、山口両氏による開帳期間の提示が、坂本宗子『享保以後板元別書籍目録』に依拠しているという事情があるものとともわれる。2009年度調査のなかでは、これらの精査もおこなっていた。

表2：諸商売「敦賀屋」一覧

在 所	名 前	典 拠	備 考
江 差	敦賀屋	関川家文書 (1783 小遣帳)	江差町史・資料4
		高倉文書 (1835 御口銭取立帳)	
	敦賀屋重次郎	関川家文書 (1842 御口銭取立帳)	
		増田伝左衛門文書 (1815 諸用留)	
		増田伝左衛門文書 (1815 願書)	
		増田伝左衛門文書 (1867 諸用留)	
	敦賀屋与八	西川伝右衛門文書 (1829 金子借用証文)	福井県文書館 DB
		西川伝右衛門文書 (1843 年賦証文)	
	敦賀屋嘉代吉	西川伝右衛門文書 (1846 金子借用証文)	高島連上家宛、口店宛
		西川伝右衛門文書 (1847 金子借用証文)	
		西川家伝左衛門文書 (店勘定帳 1859 ほか)	
		西川伝右衛門文書 (1862 金子借用証文)	
		法源寺文書 (公衆用記録 1862)	
		右近家文書 (年末詳 12 月書帳)	
松 前	敦賀屋留蔵	私田家文書 (和田家諸用記録 1830)	留蔵＝留蔵？
	敦賀屋高蔵	和田家文書 (和田家諸用記録 1852)	
	敦賀屋重治郎		北前船の人々
	敦賀屋重三郎		北前船と蝦夷地
	敦賀屋	松前商人定宿帳 (1849 頃)	松前市史・史料3
	敦賀屋忠左衛門	1665 白八幡神社神輿寄進者	鎌ヶ沢町史・史料編
	敦賀屋利右衛門	1665 白八幡神社神輿寄進者	鎌ヶ沢町史・史料編
	敦賀屋重次郎	貞享検地帳 (1687)	鎌ヶ沢町史
	敦賀屋達左衛門	『津軽史』 (1692 出火、焼損24軒)	鎌ヶ沢町史
	敦賀屋徳次郎	『津軽史』 (1693 鎌ヶ沢八幡宮山雪崩)	鎌ヶ沢町史
鶴ヶ沢	敦賀屋徳次郎	鎌ヶ沢問屋兵衛船名部日記 (1839)	鎌ヶ沢町史・史料編
	敦賀屋金九郎	白八幡神社本殿玉垣 (1816)	鎌ヶ沢町史
			鎌ヶ沢町史
	敦賀屋次郎右衛門	『津軽史』 (1688 榎末木材積出)	深浦町史・年表
		『津軽史』 (1695 深浦荒況、榎末木草根伐採)	
	敦賀屋治郎兵衛	手形増額につき進物割合覚 (1845)	秋田屋御用留
		小船順番覚 (1846 新潟口口当り)	(松井冬樹編、深浦町教育委員会)
		大船初船順番覚 (1849 尾川船勝ヶ沢廻砂糖積)	秋田屋御用留
		円覚寺大般若經奥書 (1863)	円覚寺誌、(深浦市史)
		小船順番覚 (1863 越後船川伊藤船相当り)	秋田屋御用留
	敦賀屋 (其柳)	広田家文書 (1871 船問屋規定書)	深浦町史・上巻
	敦賀屋兵衛	富士宮権現御祈願その他	深浦町史・下巻
	敦賀屋	十三民謡 (砂山まつり)	五所川原、みなと屋HP
	敦賀屋六兵衛	運上屋文書 (1853 積丹神社神幸詣札)	積丹町史引用
小 泊	敦賀屋等右衛門	伊藤家大福帳 (浜村家名、番町呼出之覚)	小泊町史・中巻、資料編
	敦賀屋五郎兵衛	伊藤家大福帳 (浜村家名、番町呼出之覚)	
	敦賀屋治右衛門	関川家文書 (1756 永代客船帳)	江差町史・資料4
	敦賀屋善次郎	久星客船帳 (五一属家文書、1790 - 1870)	久星客船帳 (野辺地町郷土資料双書)
	角屋三兵衛		野辺地町史
	角屋伊平太		
	敦賀屋吉兵衛	滝屋文書 (1796 江崎物一件答書)	日青森市史
	敦賀屋吉兵衛	八木橋文庫 (1725 青森町惣家別帳改帳)	
	敦賀屋	滝屋文書 (1853 家内通帳)	日青森市史
	敦賀屋藤三郎	八木橋文庫 (1725 青森町惣家別帳改帳)	
南 部	敦賀屋嘉代吉	熊本屋客船帳 (1849 入津)	出雲崎町史・海運2
	敦賀屋右衛門	熊本屋客船帳 (1868 入津)	出雲崎敦賀屋南部出店

在 所	名 前	典 拠	備 考
出 羽	敦賀屋市郎左衛門	『網語』 (鈴木重孝/1811-1863、著)	
	敦賀屋六左衛門	淡部伴松文書 (年末詳書簡)	秋田県公文書館 HP
	敦賀屋庄右衛門	淡部伴松文書 (年末詳書簡)	秋田県公文書館 HP
	敦賀屋佐平次	『諸商人船見』 (1855 江戸湯島大越屋版)	三上友道書林江戸湯島大越屋版
	敦賀屋多左衛門	長浜屋旧蔵 / 歳々入船帳 (1864 入船)	秋田県立博物館蔵 30
	敦賀屋清五郎		北前船の人々
	敦賀屋嘉右衛門	日言八幡神社文書 (1599 同神社統人)	北前船の人々
	敦賀屋与四郎	白鳥家文書 (成 12 月、家賃皆納につき覚書)	秋田県公文書館 HP
			止本島崎町と磯崎町江島家
			吉三郎兵衛宛
新 潟	敦賀屋吉左衛門	松下俊夫文書 (1763 金子借用証文)	福井県文書館 DB
		笹井正文書 (1794 浜田屋船勘定帳)	新潟県史・資料10
		笹井正文書 (1804 浜田屋船勘定帳)	江差町史・資料1
		田巻新太郎文書 (1845 会津藩大坂廻米御請証文)	新潟市史・資料2
		那珂湊南部屋廻舟入津覚 (1854 入津)	江差町史・資料1
		浜田外ノ浦清水家客船帳 (1864 入津)	新潟県史・資料9
		江差年屋文書 (1868 三番間尺帳)	新潟県史・資料9
		江差年屋文書 (1864-70 間尺帳)	新潟県史・資料10
		江差年屋文書 (1868 - 71 三番間尺帳)	新潟県史・資料10
	敦賀屋仁三郎	滝谷文書 (1857 二番家内年鑑)	日青森市史
越 後	敦賀屋七左衛門	1724 同船田野沢で破船	御国日記
	敦賀屋源左衛門	新潟町会所文書 (1738 返答書)	新潟市史・資料2
	敦賀屋弥兵衛	松下俊夫文書 (1763 金子請取覚)	福井県文書館 DB
	敦賀屋存右衛門	(1843 新潟町中地子石高間数家並人別帳)	古町通、武之町東方に所在
	敦賀屋嘉助	千島諸宿帳 (1850 頃)	松前市史・史料3
	敦賀屋記助	1852 伊藤家用留帳 (1794 西、船頭人別改)	新潟市史・資料2
	敦賀屋忠右衛門	(1843 新潟町中地子石高間数家並人別帳)	新潟市史・資料4
	敦賀屋高蔵	1852 伊藤家用留帳 (1823 改)	新潟市史・資料2
	敦賀屋与四郎		1837 本二之町に所在
	敦賀屋与兵衛	(1843 新潟町中地子石高間数家並人別帳)	他門通、寺之町大崎に所在
出 雲 崎	敦賀屋与左衛門		本引通、下巻之町西方に所在
	敦賀屋権蔵		片原通、武之町西方に所在
	敦賀屋庄左衛門	野口家文書 (1711 公用書簡)	新潟県史・資料7
	敦賀屋次左衛門	野口家文書 (1711 公用書簡)	新潟県史・資料7
		野口家文書 (1711 公用書簡)	新潟県史・資料7
		能登屋文書 (1720 願書奥印)	出雲崎町史・資料1
		鳥井儀資文書 (1723 敦賀屋資産目録)	新潟県史・資料7
		鳥井儀資文書 (1724 口上書)	新潟県史・資料7
	敦賀屋吉左衛門	鳥井儀資文書 (1731 町年寄役印付)	出雲崎町史・資料1
		鳥井儀資文書 (1760 町人賞書)	出雲崎町史・資料1
出 雲 崎	敦賀屋治左衛門	能登屋文書 (1771 願書)	出雲崎町史・資料1
		鳥井儀資文書 (1772 願書)	出雲崎町史・資料1
		鳥井儀資文書 (1858 蝦夷地産物新潟入津)	新潟県史・資料7
		能登屋文書 (1720 願書奥印)	出雲崎町史・資料1
		鳥井儀資文書 (1724 口上書)	新潟県史・資料7
		長谷川文書 (1788 極証文)	出雲崎町史・資料1
	敦賀屋政右衛門	鳥井儀資文書 (1731 町年寄役印付)	出雲崎町史・資料1
		関川家文書 (1756 永代客船帳、1785 入船)	江差町史・資料4
	敦賀屋善左衛門	関川家文書 (1756 永代客船帳、1785 入船)	江差町史・資料4
	敦賀屋喜兵衛	関川家文書 (1756 永代客船帳、1785 入船)	江差町史・資料4
出 雲 崎	敦賀屋多吉	野口家文書 (1763 返答書)	新潟県史・資料7
		鳥井儀資文書 (1763 願書)	出雲崎町史・資料1
	敦賀屋嘉七	野口家文書 (1763 返答書)	新潟県史・資料7
		鳥井儀資文書 (1763 願書)	出雲崎町史・資料1
	敦賀屋藤左衛門	能登屋文書 (1771 願書)	出雲崎町史・資料1
		津田家文書 (1845 虎仕切)	新潟県史・資料7
	敦賀屋多助	鳥井儀資文書 (1858 返答書)	新潟県史・資料7

在	所	名 前	典 拠	備 考
越後	出雲崎	敦賀屋与八	鳥井儀資文書 (1832 長徳丸勘定帳)	新潟県史・資料7
			鳥井儀資文書 (1822 津証文)	新潟県史・資料7
			鳥井儀資文書 (1832 長徳丸勘定帳)	新潟県史・資料7
		敦賀屋権之助	鳥井儀資文書 (1857 北越夷地御用留)	新潟県史・資料7
			鳥井儀資文書 (1857 名主退役帳)	新潟県史・資料7
			{その他多数の典拠あり}	
		敦賀屋長兵衛	磯野家文書 (1785 廻船掛借米代金取立)	出雲崎町史・資料1
			鳥井儀資文書 (1786 中条村田地土入)	出雲崎町史・資料1
		敦賀屋直衛門	岩崎庄次「長景の出来事情」	春秋309-399-401 (1998年?)
			岩崎庄次「長景の出来事情」	
		敦賀屋兵四郎	鳥井儀資文書 (1746 寛)	出雲崎町史・海運3
			岩崎庄次「長景の出来事情」	
佐渡	真江津	敦賀屋三右衛門	1823 算字門人録	上越市史・資料4
		敦賀屋三次郎		横町
	栃尾	敦賀屋	富川大塊 (1799 - 1856) 伝記	敦賀屋 (大橋氏) より養子
			大橋宗之助吉庵 (1852 没) 伝記	長岡市立図書館 HP
	小水	敦賀屋	{小水敦賀屋文書}	笠木氏
		敦賀屋弥兵衛	佐渡相川志 (宝暦初期編纂)	佐渡相川 郷土史事典
	放生津	つるがや	佐渡小水谷屋客船帳 (1864 入津)	新潟県史・資料10
		敦賀屋次郎兵衛	1699 大町分御高・屋敷割替納得書	津・ 市史・通史
越中	氷見	小敦賀屋与三右衛門	松村屋文書 (1731.8 狹業につき願書)	水戸市立中央図書館蔵書
			松村屋文書 (1731.8 狹業につき願書)	水戸市立中央図書館蔵書
		つる可庵三次郎	中村屋文書 (御用日記 1837.7、質屋名前)	水戸市立中央図書館蔵書
			中村屋文書 (御用日記 1837.7、質屋名前)	水戸市立中央図書館蔵書
	敦賀屋三四郎	敦賀屋三四郎	中村屋文書 (御用日記 1837.7、質屋名前)	水戸市立中央図書館蔵書
			中村屋文書 (御用日記 1837.7、質屋名前)	水戸市立中央図書館蔵書
	加賀	敦賀屋吉十郎	諸事開書留	加賀藩史料 16 - 2
			諸事開書留	加賀藩史料 16 - 2
越前	府中 (武生)	敦賀屋九兵衛	府中家譜記 (1851)	武生立業会出版本
		敦賀屋九平次	敦賀屋機業場	福井県立大学蔵書
		敦賀屋	敦賀屋機業場	福井県立大学蔵書
		敦賀屋龍造	府中家譜記 (1851)	武生立業会出版本
	原	敦賀屋与右衛門	青木家文書 (1834 佐佐木上柳・佐々木色々松)	福井県立大学蔵書
		(敦賀屋?) 与助	岡田健彦文書 (年未詳 9 月、江古書簡)	福井県立大学蔵書
		敦賀屋庄三郎	岡田健彦文書 (年未詳 9 月、江古書簡)	福井県立大学蔵書
		敦賀屋三三郎	越前某船宿入船帳 (1761 入船)	越前町史・上巻
	敦賀	敦賀屋善右衛門	敦賀屋善右衛門	敦賀屋庄三郎宛 (与助・備村、正吉は残留)
		敦賀	敦賀屋善右衛門	敦賀屋善右衛門
		敦賀屋源之助	佐渡小水谷屋客船帳 (1867 入津)	小水町史・史料下
		敦賀	敦賀屋源之助	近江磯野屋源兵衛出店
近江	榑津	敦賀屋	個人メモ	「半平」
		敦賀屋	河路費文書 (1856 御用金上納番付)	長浜町誌
摂津	大坂	敦賀屋四郎兵衛	諸藩問屋并船宿	海軍史料叢書8
		敦賀屋新右衛門	1778 佐竹様御用銅積深浦并荷打	御国日記
		敦賀屋新兵衛	石本家文書 (1850 大坂訴訟一件)	石本家文書 (1850 大坂訴訟一件)
		敦賀屋新兵衛	石本家文書 (1850 大坂訴訟一件)	石本家文書 (1850 大坂訴訟一件)
伊勢	桑名	敦賀屋庄三右衛門	我輩御代官上津文書 (1860 御用金上納番付)	岐阜県歴史資料館 DB
		敦賀屋庄三右衛門	我輩御代官上津文書 (1860 御用金上納番付)	岐阜県歴史資料館 DB
		敦賀屋庄三右衛門	我輩御代官上津文書 (1860 御用金上納番付)	岐阜県歴史資料館 DB
		敦賀屋庄三右衛門	我輩御代官上津文書 (1860 御用金上納番付)	岐阜県歴史資料館 DB
駿河	静岡 (静岡)	敦賀屋作左衛門	秋山義雄文書 (1684 駿河町人金上納番付)	静岡県史・資料 13
		敦賀屋善左衛門	秋山義雄文書 (1684 駿河町人金上納番付)	静岡県史・資料 13
		敦賀屋庄兵衛	志水源兵衛旧蔵文書 (尾関又兵衛書簡)	福井県立大学蔵書
		敦賀屋庄兵衛	志水源兵衛旧蔵文書 (尾関又兵衛書簡)	福井県立大学蔵書
未詳	未詳	敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
	未詳	敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛
		敦賀屋庄兵衛	山本一三文書 (年未詳 11 月毎日付書簡)	「大和日記」宛

各自治体史編纂の事情や、近世以降の史料掲載についての物理的限界性、史料選択の傾向などを考慮しなければならないが、おそらく「敦賀屋」展開の範囲は「第1次」で指摘したように、敦賀以北の主要な北前船寄港地が所在する範囲、具体的にいえば北海道から日本海沿岸を若狭湾に至る範囲を大きく出ることはない可能性が高い。

自治体史の博搜と並行しておこなわれた全国電話帳 (NTT ハローページ) を用いた「敦賀屋」「敦賀谷」「敦賀」「鶴賀」「鶴賀屋」「鶴賀谷」「角鹿」等の苗字検索作業でも、北海道から青森、秋田が群を抜いており、新潟を含む北陸地域がこれに次ぐというデータを得た。それ以外の地域で比較的数字の高い東京、大阪などの都市圏は総人口も多く、また移転等の要素も加味しなければならないので、歴史的存在としての「敦賀屋」の地域的分布と現在の「敦賀屋」関係苗字分布は一定の関連性をもつといえるのかもしれない (本稿末尾表3 参照)。

しかし、その一方で、陸奥板柳 (青森県北津軽郡板柳町) や越後栃尾 (新潟県長岡市栃尾) に「敦賀屋」を見いだせたことは、北前船寄港地に接続する河川交通にも注目した「敦賀屋」捜索が必要であることを痛感させた。

白山山地に源を発した岩木川は津軽平野を貫流し河口湖である十三湖を経て日本海に流れ出る。板柳は海から隔たりある土地ながら岩木川流域に位置し、川湊を擁していた。したがって、十三湊をはじめとする津軽半島の諸湊とも舟運を通じ、さらには日本海交易に接続していたことは疑いない。

栃尾も同様である。信濃川の支流刈谷田川の舟運は見附 (今町) に至り、刈谷田川の支流西谷川に通じる船堀が江戸時代の栃尾には存在した (角川地名辞典)。見附の舟運は寺泊その他と通じていたから、これも日本海交易と接続する河川交通の手段を擁していた事例といえる。

それぞれ陸運の要素も加味しなければならない土地柄ではあるが、現在の景観や現代人の常識をある意味で超えるほどの質量をもっていたのが鉄道開設、普及以前の河川交通である。板柳、栃尾の「敦賀屋」の実像はなお見えてはいないが、日本海交易と河川交通をもって接続する内陸諸地域への「敦賀屋」の展開を今後見極めていく必要があるであろう。

## 2. 「敦賀屋」個別調査・研究への展望

ここで再び表2に目を転じ、個別「敦賀屋」の調査・研究の可能性を見ていきたい。

### ①北海道の「敦賀屋」

北海道については、もとより近江商人の進出が顕著であり、江戸幕府直轄支配以前は松前に両浜組というギルドの組織を形成し、場所請負や交易により商業利潤を蓄積したことはよく知られている。その意味で、松前・敦賀屋嘉代吉の存在

を示す史料が、北海道交易の始祖と呼ばれ、両浜組の有力メンバーであった西川伝右衛門家の伝来文書から見いだせたことは重要である。西川伝右衛門家（住吉屋、近江八幡では松前屋／中一、のち中一商会）と敦賀屋嘉代吉との関係は、なお検討の余地はあるものの、西川伝右衛門家は蝦夷地高島（現・小樽市高島町）を場所請負地としており、典拠史料にある「高島運上家」とはその経営拠点と考えられる。今後、西川伝右衛門家文書（滋賀大学経済学部資料館所蔵）の調査により両者の関係が明確になることを期待したい。

敦賀屋嘉代吉以外の江差、松前、函館の「敦賀屋」についても、近江商人ないしこれと関係深い地元商人かと推察される。近江商人にとって敦賀は松前／北海道交易への窓口であり、夢の起点であったはずである。「敦賀屋」展開の背景に、近江と北海道を往来する人とモノの動きがあったことは疑いないであろう。

## ②陸奥・出羽の「敦賀屋」

今年度「敦賀屋」史料調査にかかる現地調査の第1回は青森県西部鰺ヶ沢から深浦、秋田県男鹿半島において実施した。ここでは、これら現地調査の成果も交えながら「敦賀屋」個別調査・研究の展望について触れておきたい。

鰺ヶ沢は江戸時代津軽藩の表玄関として機能した湊で、「第1次」ですでに何件かの「敦賀屋」が確認されていた。湊に近接して鎮座する白八幡宮は、9世紀坂上田村麻呂の勧請と伝え、地域住民や湊を往来する船乗りたちの信仰を集めたが、その玉垣等の寄進者銘はその信仰の盛んであったことを示している。敦賀屋金九郎の銘も玉垣の一隅に見いだせた。また、白八幡宮の例祭は「京祭」と呼ばれる。青森県内にはこうした上方文化に影響を受けた祭りや芸能が多くこのさされているが、鰺ヶ沢白八幡宮の例祭は津軽藩御用湊の名に恥じない、古式も豊かな祭りであり、日本海交易によって結ばれた上方の風俗を移転した様子が見て取れる華やかさであるという。

深浦はかつて安東浦とよばれた湊で、日本海交易においてはこの地域有数の風待ち湊として栄えたところである。すでに「第1次」でもここに「敦賀屋」があったことは確認済みであるが、その典拠となった円覚寺所蔵大般若経奥書（寄進者銘）の確認を中心とした調査を実施した。円覚寺は、大同2（807）年、坂上田村麻呂の観音堂建立が端緒と伝え、その後、貞観10（868）年に泰澄の法脈を継ぐ修験僧の円覚が開創した寺院で、江戸時代までは当山派修験の道場であった。濶間観音の名で親しまれ、津軽藩の保護とともに日本海交易に従事する商人や船乗りたちの信仰を集めた。敦賀の荘司（丸屋）半助が奉納した船絵馬を含む多くの船絵馬や、信仰によって海難を免れた船乗りたちが奉納した髷額を所蔵することでも著名な寺院である（円覚寺HP、<http://www.engakuji.jp>）。この円覚寺に、文久3（1863）年から元治元（1864）年にかけて寄進された大般若経600巻があ

り、その第116巻が当地（深浦）の敦賀屋治郎兵衛の寄進になる（これが「第1次」掲載の典拠）。この敦賀屋治郎兵衛について、円覚寺での聞き取り調査などでも、その子孫や地元伝承に関する情報に接することはできなかったが、『秋田屋御用留』（桜井冬樹編、深浦町教育委員会）など現地で入手した資料により、その活動の一端を知ることができたので、前掲表2では典拠史料を追加した。

次に男鹿半島調査で個別調査・研究の展望を得た「敦賀屋」である。「第1次」は北前船寄港地の教育委員会、歴史・文化施設や報道機関等にも配布したが、男鹿市から期待していた情報もたらされたのは送付後間もない昨年5月初めのことであった。男鹿市教育委員会生涯学習課長泉明氏からの封書には、船川の敦賀屋六左衛門が敦賀出身であることを示す同家菩提寺（円応寺）過去帳のコピーが添えられていたのである。関係部分を示せば以下のようになる。

船川六左エ門 越前敦賀 ヨリ元禄年中 秋田へ下り円應 寺へ若徒ニテ三  
年奉公其後 舟川住ス□□□ 己ニ舟川ヲ切開 クロノ慮アリテ 秋田下ル  
舟一同 六左衛門宿所□ 其後敦賀 ヨリ子孫引越 相続榮□□ □□□□

これによれば、「船川三家」のひとつ敦賀屋六左衛門が敦賀出身であり、現在の船川港の端緒を開いたという。越後出雲崎の敦賀屋（鳥井氏）に続いて、2件目の敦賀出自が確かな「敦賀屋」の発見であった。

今年度現地調査を青森・秋田方面に実施した最大の理由がこの発見にあったが、8月中旬の調査では泉氏からさらに明治39・40年「町会議事録」（船川港町役場文書）を紹介された。ここには、「旅人宿及荒物営業」の菅原六左衛門が記され、これが敦賀屋六左衛門の子孫であること、菅原氏には客船帳が残されているが現在は事情がありしばらく調査ができないこと、ご子孫はなお船越に居住されていることなどの情報を得た。敦賀屋客船帳については、先年亡くなられた郷土史家の磯村朝次郎氏が「男鹿半島における海運業の発達」（『男鹿半島研究』14、1986年）という論考で紹介されており、この論考についても調査以前に泉氏から提供を受けていたが、なお原史料に接する機会が遠くないことを願っている。

なお、この円応寺は一向宗。5代住持祐哲は（元禄か）10年に越前金津に上り3年居住して帰国したが、その折聖徳太子より授与された尊像をもたらしたことも、上記引用部と同じ頁に見える。泉氏の配慮であるが、越前と男鹿との歴史的関係を知る史料でもある。

さて、秋田の調査はほぼ男鹿半島に終始したが、西岡虎之助『近世における一老農の生涯』（講談社学術文庫）でも名高い営農家・開拓事業家の渡部斧松家の伝来文書にも敦賀屋六左衛門、敦賀屋庄右衛門の名を見いだせたこと、秋田県立博物館で嶋田忠一・新堀道生「附船宿長浜屋旧蔵「歳々入船帳」の概要」（『秋田

県立博物館研究報告』30、2005年）別刷の提供を受け、そのなかに敦賀屋多左衛門を見出したことなどは、調査の成果といえる。

泉明氏によれば、男鹿半島には、越前・加賀からの移住者が多く、一向一揆の壊滅とその関係者の逃避行がその背景にあり、下間などそのことを想起させる苗字も確認されるという。近江商人をはじめとする日本海交易への参入が動機となった移住者たちとともに、こうした戦敗者たちもまた対馬海流に乗って北を目指したことを認識させてくれるお話であった。「第1次」への懇切なご対応といい、調査へのご協力といい、泉明氏にはこの場を借りて深謝したい。

### ③越後の「敦賀屋」

出雲崎「敦賀屋」については「第1次」でも紹介した通り、『出雲崎町史』の刊行と、敦賀短期大学地域総合研究所による『敦賀屋（鳥井氏）文書』調査によって、調査・研究の条件は一定準備されている状況にある。ただ、「敦賀屋」調査について関心を寄せていただいた中日新聞川崎宏三記者（敦賀支局／当時）の取材によれば、鳥井家のご当主はご自身のご高齢と後継者への不安から伝来資料の行末について心配しておられるという（中日新聞 2008年6月23日）。いずれ然るべき機関が関与してくれるものと推察するが、「敦賀屋」史料の散逸は免れないところである。

次に、今回の自治体史等博搜作業で新潟の「敦賀屋」を多く検出することができた。また、直江津や栃尾（前掲）にも「敦賀屋」が検出され、越後の「敦賀屋」固有の展開も考えられそうである。それぞれなお個別の調査・研究への展望を持ち得ないが、本稿脱稿後の2月下旬に新潟・佐渡方面に現地調査を予定しており、そのなかで手掛かりを得られないかと期待している。その成果があれば、また本稿続編で報告したい。

### ④越中・加賀・越前の「敦賀屋」

自治体史等博搜作業と、すでに確認済みながら検討に至っていなかった青木与右衛門家文書（福井県越前町厨）の通覧により、何件かの「敦賀屋」を追加することができた。青木与右衛門家のほか、越中水見、越前府中の「敦賀屋」に個別調査・研究の機会があるものと期待している。加賀、能登についてはなお基本的な捜索が必要であり、自治体史等博搜作業をここでは継続していきたい。

### ⑤伊勢の「敦賀屋」

前述したように、「敦賀屋」が検出できる地域には偏りがあり、日本海側でも京都府以西では現在までに検出事例がない。太平洋側となればこれも当然検出事例は少ないのであるが、まったくなかったわけではなく、むしろこの伊勢の「敦

賀屋」や後掲する駿河の「敦賀屋」のように、個別調査・研究への展望を豊かにする事例も存在する。

伊勢桑名湊の敦賀屋庄右衛門は、関係史料によれば、桑名湊の廻船差配の中心にあった商人であり、あわせて江戸幕府直轄支配のもとにあった飛騨の材木を飛騨川～木曽川と川下して桑名湊から江戸へ廻送する業務を請負っていたようである。桑名湊廻船差配人としての地位は、事実上幕藩体制下の政治・経済システムが生きていた明治初年まで継続した。

大垣御藩御預所濃州村々去午年御年貢東京御廻米之内、御米千貳百五拾俵、遠州川崎八郎左衛門船・沖船頭清蔵乗<sup>江</sup>御積立、正月廿八日卯之上刻、勢州桑名湊出帆仕候処、実正二御座候、以上

明治四年<sup>未</sup>年正月廿八日 <sup>廻船方</sup> 敦賀屋庄右衛門 印  
<sup>同</sup> 大橋屋又左衛門 印  
前書之通相違無之者也  
小倉権少属 印

笠松御県御支配所濃州村々去午年御年貢東京御廻米之内、千貳百五拾俵、尾州内海直乗<sup>兵衛</sup>御積立、三月二日卯上刻、勢州桑名湊出帆仕候処、実正二御座候、以上

明治四年<sup>未</sup>年三月二日 <sup>廻船方</sup> 敦賀屋庄右衛門 印  
<sup>同</sup> 大橋屋又左衛門 印

三上笠松県権大属 印

静岡県南伊豆町妻良は太平洋海運の風待ち湊として栄えたところであるが、廻米を乗せた上記の船も妻良に入津し風を待ったため、これら史料が妻良にのこされることになった（妻良区有文書、『静岡県史』資料編13）。また、飛騨材木運送を敦賀屋庄右衛門が請負った一件についての関係史料は、江戸幕府の飛騨支配の拠点高山陣屋（岐阜県高山市）に集積された古文書群（「飛騨郡代高山陣屋文書」）に含まれていることが判明している。「飛騨郡代高山陣屋文書」については、岐阜県歴史資料館（岐阜市）が目録を整備し、古文書原本の閲覧も許可しているので、すでに一度概要調査をおこなったところである。

妻良の事例のように、桑名湊を出帆した廻船の史料のなかに敦賀屋があらわれ

る場合は、ある種の幸運によって関係史料に遭遇することを期待しなければならないが、「飛騨郡代高山陣屋文書」の場合は調査環境にも恵まれている。当面はこちらから敦賀屋左衛門の個別調査・研究を進めていくことになろう。

#### ⑥駿河の「敦賀屋」

駿河国安倍郡梅ヶ島（現・静岡市）に所在した安倍金山（日影沢金山）は、今川義元、武田信玄、徳川家康がそれぞれ開発、運営した金山である。家康はその産出金で「慶長小判」（「駿河墨書小判」「駿河墨判」）を铸造したとされる。

この安倍金山が江戸幕府の直轄支配下（はじめ駿府町奉行支配）に置かれたことはいうまでもないが、遠州中泉代官所支配下にあった貞享元（1684）年5月、駿府町人28名が連署で金山経営の請負証文を中泉代官近山六左衛門（安致、『寛政重修諸家譜』による）に提出した。運上銀が遅滞に及べば彼らが所持する町屋舗を召し上げられても構わないとする担保文言も含むこの請願書は、近山の挙状を添えて江戸幕府勘定所に提出されその裁可を得た（秋山義雄氏所蔵文書、『静岡県史』資料編11）。近山は金山支配にあたる奉行屋敷を自費で建設したと伝えられ、その最期も駿河の陣屋で迎えたという（『寛政重修諸家譜』）。

さて、この金山請負を請願した町人28名のなかに、敦賀屋作左衛門、敦賀屋善左衛門がある。これら「敦賀屋」の軌跡は今のところ上記史料以外に確認されていないが、連署28名はともに駿府の中心街に屋舗をもつ者たちである。今後、駿府町人関係史料の捜索によって、これら「敦賀屋」の個別調査・研究の展望は拓けるのではないかと期待している。

#### おわりに

2008年度の「敦賀屋」調査（一部未了）の概要は以上である。文頭で述べたように、いよいよ本題である個別「敦賀屋」調査・研究への展望が少しながら拓けてきたというのが今年度調査の成果ということになろうか。

2009年度調査においては、北海道および青森北部に現地調査を実施するほか、岐阜、三重、静岡、富山等にも短期調査に出たいと考えている。「敦賀屋」調査がおもしろいほかの深さをもっていることを調査の進捗とともに感じているが、次年度の報告でどこまで極められるか、筆者がもっとも楽しみに感じている。

表3：電話帳検索による「敦賀屋」関係苗字都道府県別一覧

都道府県	市町村	敦賀屋	敦賀谷	鶴賀谷	鶴ヶ谷	敦賀	鶴賀	角鹿	その他の苗字
北海道	札幌市	0	0	0	0	43	0	0	つるが苑1（飲食店）
	函館市	0	0	0	4	20	0	0	
	北斗市	0	0	0	1	0	0	0	
	七飯町	0	0	0	0	2	0	0	
	松前町	0	0	0	3	4	0	0	
	江差町	0	0	0	0	1	0	0	
	小樽市	0	0	0	1	1	0	0	
	厚沢部町	0	0	0	0	1	0	0	
	木古内町	0	0	0	0	0	0	0	
	知内町	0	0	0	0	3	0	0	
	登別市	0	0	0	0	3	1	0	
	室蘭市	0	0	0	0	7	0	0	
	伊達市	0	0	0	0	1	0	0	
	美唄市	0	0	0	0	3	0	0	
	岩見沢市	0	0	1	0	0	0	0	
	三笠市	0	0	0	0	0	1	0	
	北見市	0	0	0	0	2	0	0	
	釧路市	0	0	0	0	11	0	2	
	赤平市	0	0	0	0	1	0	0	
	奈井江町	0	0	0	0	4	0	0	
	新ひたか町	0	0	0	0	1	0	0	
	日高町	0	0	0	0	0	0	1	
	浦河町	0	0	0	0	2	0	0	
	えりも町	0	0	0	0	0	0	2	
	苫小牧市	0	0	0	0	5	0	0	
	帯広市	0	0	0	0	4	0	0	
	音更町	0	0	0	0	1	0	0	
	幕別町	0	0	0	0	1	0	0	
	旭川市	0	0	0	0	2	0	0	
	江別市	0	0	0	0	1	0	0	
	北広島市	0	0	0	0	1	0	0	
	石狩市	0	0	0	0	1	0	0	
	根室市	0	0	0	0	0	0	3	
	岩内町	0	0	0	0	0	0	0	
	芦別市	0	0	0	0	2	0	0	
	余市町	0	0	0	0	2	0	0	
	寿都町	0	0	0	0	4	0	0	
	羅臼町	0	0	0	0	4	0	0	
	大空町	0	0	0	0	1	0	0	
	長万部町	0	1	0	0	0	0	0	
	上士幌町	0	0	0	0	0	0	1	
	士幌町	0	0	0	0	1	0	0	
	湧別町	0	0	0	0	0	0	0	
	森町	0	0	0	0	1	0	0	
	浦幌町	0	0	0	0	2	0	0	
	豊頃町	0	0	0	0	2	0	0	
	栗山町	0	0	0	0	2	0	0	
	長沼町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	2	0	0	118	0	0	
青森県	青森市	0	0	0	0	15	9	0	
	三沢市	0	0	0	0	0	0	0	
	弘前市	0	0	11	0	0	0	1	
	黒石市	0	0	0	1	1	0	0	
	七戸町	0	0	0	0	0	0	0	
	田舎館村	0	0	0	0	1	0	0	
	藤崎町	0	0	0	1	0	0	0	
	板柳町	0	0	0	0	2	0	0	
	中泊町	0	0	0	0	17	0	0	
	津軽市	0	0	7	0	14	8	0	

都道府県	市町村	教習屋	教習谷	鶴賀谷	鶴ヶ谷	教習	鶴賀	角鹿	その他の苗字
青森県	野辺地町	0	0	0	0	3	0	2	つのが1 (運輸業)
	五所川原市	2	0	0	0	17	3	3	
	(合計)	2	0	18	2	72	30	7	
秋田県	秋田市	2	4	0	0	*	*	0	ツルガヤ1 (養機具店)
	男鹿市	0	2	0	0	9	0	0	
	大仙市	0	0	0	0	1	0	0	
	仙北市	0	2	0	0	0	0	0	
	大館市	0	0	0	0	1	0	0	
	鹿角市	0	0	0	0	*	0	0	
	能代市	0	0	0	0	10	0	0	
	(合計)	2	8	0	0	23	0	0	
岩手県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
	山形県	0	0	0	0	0	0	0	つるが1 (理容店)
宮城県	仙台市	0	0	0	0	2	0	0	つるが1 (飲食店)、ツルガ1 (製造業)
	栗原市	0	0	0	0	1	0	0	
	多賀城市	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	4	0	0	
福島県	会津若松市	0	0	0	0	0	2	0	つるが1 (理容店)
	会津美里町	0	0	0	0	0	4	0	
	(合計)	0	0	0	0	0	6	0	
新潟県	新潟市	0	0	0	0	8	0	0	ツルガ1 (機材店)
	小千谷市	1	0	0	0	0	0	0	
	長岡市	1	0	0	0	0	0	0	教習屋1 (茶舗)
	村上市	0	0	0	0	6	0	0	
	三条市	1	0	0	0	0	0	0	
	(合計)	3	0	0	0	14	0	0	
富山県	新水市	0	0	0	0	2	0	0	
	高岡市	0	0	0	0	3	0	0	
	水見市	0	0	0	0	6	0	0	
	立山町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	12	0	0	
石川県	金沢市	0	0	0	0	8	11	0	
	羽咋市	0	0	0	0	3	0	0	
	志賀町	0	0	0	0	4	0	0	
	能美市	0	0	0	0	0	1	0	
	小松市	0	0	0	0	0	4	0	
	白山市	0	0	0	0	1	4	0	
	内灘町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	17	20	0	
福井県	福井市	1	0	0	0	0	0	0	鶴が家1 (菓子店)
	越前市	0	0	0	0	6	0	0	
	鯖江市	0	0	0	0	3	0	0	
	越前町	0	0	0	0	0	0	2	
	(合計)	1	0	0	0	9	0	2	
栃木県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
群馬県	高崎市	0	0	0	0	*	0	0	
	さいたま市	0	0	0	0	2	0	0	
	ふじみ野市	0	0	0	0	1	0	0	
	上尾市	0	0	0	0	1	0	0	
	深谷市	0	0	0	0	0	1	0	
	蓮田市	0	0	0	0	*	0	0	
	日高市	0	0	0	0	0	2	0	
	入間市	0	0	0	0	2	0	0	
	鉾田市	0	0	0	0	0	2	0	
	狭山市	0	0	0	0	2	0	0	
	所沢市	0	0	0	0	*	1	0	
	越生町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	11	6	0	
	水戸市	0	0	0	0	0	1	0	
	三浦市	0	0	0	0	1	0	0	
	鹿島市	0	0	0	0	*	0	0	
	常陸大宮市	0	0	0	0	*	0	0	

都道府県	市町村	教習屋	教習谷	鶴賀谷	鶴ヶ谷	教習	鶴賀	角鹿	その他の苗字
茨城県	ひたちなか市	0	0	0	0	1	0	0	
	大子町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	5	1	0	
千葉県	千葉市	0	0	0	0	4	0	0	
	船橋市	0	0	0	0	2	0	0	
	松戸市	0	0	0	0	1	0	0	
	習志野市	0	0	0	0	0	1	0	
	白井市	0	0	0	0	0	2	0	
	東金市	0	0	0	0	2	0	0	
	我孫子市	0	0	0	0	1	0	0	
	柏市	1	0	0	0	1	0	0	
	成田市	0	0	0	0	2	1	0	
	木更津市	0	0	0	0	1	1	0	
	館山市	0	0	0	0	0	3	0	
	(合計)	1	0	0	0	14	8	0	
東京都	23区内	1	1	0	0	14	3	0	鶴賀屋 (染色業)
	三鷹市	0	0	0	0	1	0	0	
	武蔵野市	0	0	0	0	2	0	0	
	国分寺市	0	0	0	0	*	0	0	
	府中市	0	0	0	0	1	0	0	
	小金井市	0	0	0	0	1	0	0	
	東村山市	0	0	0	0	2	0	0	
	小平市	0	0	0	0	0	1	0	
	昭島市	0	0	0	0	1	0	0	
	羽村市	0	0	0	0	1	1	0	
	町田市	0	0	0	0	2	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	26	5	0	
神奈川県	横浜市	0	1	0	1	7	6	2	鶴ヶ屋1 (食材製造業)、鶴我2、角ヶ谷1
	川崎市	0	2	0	0	2	0	0	つるがや (飲食店)
	逗子市	0	0	0	0	1	0	0	角ヶ谷1
	横須賀市	0	0	0	0	0	0	2	
	平塚市	0	0	0	0	1	0	0	
	綾瀬市	0	0	0	0	0	0	0	角ヶ谷2
	海老名市	0	0	0	0	1	1	0	
	座間市	0	0	0	0	1	1	0	
	相模原市	0	0	0	0	2	0	0	
	厚木市	0	0	0	0	0	0	0	角ヶ谷2
	川崎市	0	0	0	0	0	0	0	
	(合計)	0	3	0	1	15	8	4	
山梨県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
静岡県	静岡市	0	0	0	0	5	0	0	
	三島市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	熱海市	0	0	0	0	2	0	0	
	伊東市	0	0	0	0	1	0	0	
	富士市	0	0	0	0	0	0	0	つるが (眼科医)
	藤枝市	0	0	0	0	0	0	1	
	袋井市	0	0	0	0	2	0	0	
	御前崎市	0	0	0	0	0	0	0	角ヶ谷1
	吉田町	0	0	0	0	0	1	0	
	芝川町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	11	1	1	
愛知県	名古屋市	0	0	0	0	2	6	1	ツルガ (建材製造業)
	春日井市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我2
	愛西市	0	0	0	0	0	0	1	
	安城市	0	0	0	0	0	1	0	
	知立市	0	0	0	0	0	1	0	
	岡崎市	0	0	0	0	0	1	0	
	東海市	0	0	0	0	0	3	0	
	知多市	0	0	0	0	0	1	0	
	豊田市	0	0	0	0	0	1	0	
	豊川市	0	0	0	0	1	0	0	
	蟹江町	0	0	0	0	1	0	0	



都道府県	市町村	敦賀屋	敦賀谷	鶴賀谷	鶴ヶ谷	敦賀	鶴賀	角鹿	その他の苗字
愛知県	東浦町	0	0	0	0	0	0	1	
	(合計)	0	0	0	0	4	14	3	
長野県	松本市	0	0	0	0	1	0	0	
	茅野市	0	0	0	0	1	0	0	
	上田市	0	0	0	0	3	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	5	0	0	
岐阜県	多治見市	0	0	0	0	0	1	0	
三重県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
滋賀県	東近江市	0	0	0	0	2	0	0	
	大之本町	1	0	0	0	0	0	0	
	(合計)	1	0	0	0	2	0	0	
京都府	京都市	0	0	0	0	3	0	0	
	大阪市	0	0	0	0	4	1	0	
大阪府	堺市	0	0	0	0	0	-	0	
	吹田市	0	0	0	0	1	0	0	
	茨木市	0	0	0	0	1	0	0	
	摂津市	0	0	0	0	1	0	0	
	東大阪市	0	0	0	0	1	0	0	
	寝屋川市	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	9	2	0	
和歌山県	海南市	0	0	0	0	0	3	0	
奈良県	河合町	0	0	0	0	1	0	0	
兵庫県	神戸市	0	0	0	0	6	0	0	
	西宮市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	加古川市	0	0	0	0	0	-	0	
	宝塚市	0	0	0	0	1	0	0	鶴我2
	三木市	0	0	0	0	1	0	0	
	尼崎市	0	0	0	0	-	1	0	
	丹波市	0	0	0	0	1	0	0	
	神河町	0	0	0	0	1	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	11	2	0	
鳥取県	鳥取市	0	0	0	0	5	1	0	
	境港市	0	0	0	0	1	0	0	
	米子市	0	0	0	0	1	0	0	
	大山町	0	0	0	0	1	0	0	
島根県	(合計)	0	0	0	0	8	1	0	
	松江市	0	0	0	0	1	0	0	
岡山県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
広島県	広島市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我2
	福山市	0	0	0	0	4	0	0	
	呉市	0	0	0	0	0	0	0	つるが1(眼科医)
山口県	(合計)	0	0	0	0	4	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	鶴我2
香川県	徳島市	0	0	0	0	1	0	0	
	阿南市	0	0	0	0	4	0	0	
徳島県	(合計)	0	0	0	0	5	0	0	
	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
愛媛県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
高知県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
大分県	大分市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我2
	国東市	0	0	0	0	0	1	0	
	別府市	0	0	0	0	0	0	0	敦加2
	佐伯市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	(合計)	0	0	0	0	0	1	0	
福岡県	福岡市	0	0	0	0	0	3	0	鶴我2、霧我2
	北九州市	0	0	0	0	0	1	0	つるが1(豆腐店、鶴我)、鶴我12、霧我2
	太宰府市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	宗像市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我2
	糸島郡	0	0	0	0	1	0	0	
	糟谷郡	0	0	0	0	0	1	0	
	筑紫郡	0	0	0	0	0	0	0	霧我1
京都府	京都郡	0	0	0	0	0	0	0	つる我1

都道府県	市町村	敦賀屋	敦賀谷	鶴賀谷	鶴ヶ谷	敦賀	鶴賀	角鹿	その他の苗字
福岡県	朝倉市	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	筑前町	0	0	0	0	0	0	0	鶴我1
	八女郡	0	0	0	0	0	0	0	
佐賀県	(合計)	0	0	0	0	1	5	0	
	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	
長崎県	北松浦郡	0	0	0	0	1	0	0	
熊本県	熊本市	0	0	0	0	1	0	0	
	菊池郡	0	0	0	0	1	0	0	
宮崎県	(合計)	0	0	0	0	2	0	0	
	宮崎市	0	0	0	0	0	1	0	
	都城市	0	1	0	0	0	0	0	
鹿児島県	(合計)	0	1	0	0	0	1	0	
	薩摩川内市	0	0	0	0	1	0	0	
沖縄県	(合計)	0	0	0	0	0	0	0	